

# 地域づくりのネットワーク形成と交流ワークショップ～半島地域づくり会議 in 幡多を例として～

橋本 拓哉（前・財団法人日本開発構想研究所研究主幹）

## 1. はじめに

地域主導の地域づくり・地域活性化を進める上で、地域外部の視点の導入は重要である。地域の日常性に埋没した地域資源の再発見や再評価には地域外部の視点が欠かせない。このような外部の視点の導入に当たっては、地域づくり主体の域内外にわたるネットワークの存在が必要である。

本稿では、特に外部主体とのネットワークに着目して、地域づくり主体のネットワーク形成のあり方を検討した上で、ネットワーク形成の契機となる地域づくりに係る「交流集会・ワークショップ」の現況を概観するとともに、交流集会の1つである「半島地域づくり会議 in 幡多」の事例に即して、参加者相互間及び開催地域に対する効果を整理することとする。

## 2. 地域づくり主体のネットワーク形成

### 2.1 地域づくり主体を取り巻くネットワーク

地域づくり・地域活性化の取り組みにあっては、活動主体あるいはキーパーソンを取り巻くように地域内外の関係主体とのネットワークが形成されている。このネットワークを通じて、活動主体やキーパーソンが有さない能力の補完や役割分担が図られる。

このネットワークは、地域内部のネットワークと地域外部とのネットワークの2種類から成る。前者は、地域づくり・地域活性化活動の核となる人材や組織と、活動に関わってくる地域内の多様な人材、組織等とのネットワークである。後者は、地域内で足りない要素を地域外の主体に求める上で不可欠なものであり、様々な能力・才能を持つ主体とのネットワークによって、地域に刺激が与えられ、地域づくり・地域活性化の推進力になる。

これらを通じて、多様な属性や背景を持つ人材が活動に関わり、その多様な価値観や能力が会合することによって、必要な情報が共有され、お互いが刺激を受け合い、結果として思いもよらないような発想やエネルギーが生まれ、活動を発展させていく。

こうしたネットワークは決して静態的なものではない。法政大学大学院エコ地域デザイン研究所（2008）によると、ネットワークングとは、同じ志や課題を持つ人や組織が緩やかにつながっていくことであり、このつながりを通じて互いに学び合い、補い合い、知恵を出すことと定義される。このネットワークングは常にネットをつないでいくという動的な意味を持つが、そのダイナミクスが失われるとネットワーク自身はすぐ死に体になってしまう。

### 2.2 外部の主体とのネットワーク

地域づくり・地域活性化活動の推進に当たっては、地域の外部に高度な専門性等を有する人材や組織等とのネットワークを形成することによって、活動に関わる人材の多様性を確保している場合が多い。また、全国各地に幅広い支援者を持っているケースが見られ、こうしたサポーターの存在が資金面での支援、知名度の向上、都市部への浸透・展開、困った時のヒントの提供など様々な役割を担っている。

地域外部の主体、すなわち「よそ者」は、地域内の人々とは違う視点でものを見、考えることができ、地域内にいると日常性に埋もれて持つことが難しい感覚や考えを持っている存在である。地域づくり・地域活性化の取り組みを進める上で、こうした「よそ者」に期待されるのは、地域住民が日常性に埋没する中で見失った地域資源の価値を再発見することである。

毎日見ているものに価値があることに気づくのは大変難しいことであり、価値への気づきには地域外部からの刺激が不可欠である。この点が、地域づくりを推進する上で、特に地域外部とのネットワーク形成が重要視される所以である。

### 2.3 外部主体との交流の効果

外部主体との交流によって、地域には様々な効果がもたらされる。敷田（2005）は、外部関係者（「よそ者」）が地域と関わることで、特に意図せ

ずとも地域にとって望ましい変化(「よそ者効果」)が起こると述べている。そうした効果として次のようなものを挙げている。

- ① よそ者が地域に存在しない知識や技能を持ち込むこと。
- ② よそ者による地域の「励起」効果(優れた芸術家が地域に短期・長期に滞在し住民と交流したり創作したりすることで、地域が刺激を受ける等)。
- ③ 地域住民が本来持っている知識(ローカルナレッジ)の表出・言語化支援。
- ④ 地域の変容を促進する効果(よそ者の持つ異質性が地域側に気づきをもたらし、そこから地域自体が変容する)。
- ⑤ よそ者が持つ「地域とのしがらみのない立場からの解決策」の提案。

地域づくり・地域活性化に取り組む活動主体が、地域外部の主体とのネットワークを通じて交流することにより、同様の効果が期待される。

### 3. ネットワーク形成等に係る「交流集会・ワークショップ」の意義

#### 3.1 ワークショップ

近年、地域づくり・地域活性化の分野においても、ワークショップ手法が活用されることが多くなっている。

ワークショップとは、「複数の人間が集まって問題や課題を解決するための手段で、共通の目標に向かって議論し、意見の違いを互いに認め合いながらも実現可能な対案を出し合い、合意形成を図っていく場」(世古(2007))と定義される。ワークショップは、参加者の協働作業により知恵を出し合い、一定の成果(合意等)にたどり着く必要がある。

このような何らかの合意形成や成果を重視するワークショップでは、例えば参加者が小グループに分かれて、提示された地域課題に対する対応策、解決策を作ってみた上で、また全体会議に持ち帰るなどの対流型の作業に取り組むことが多い。

この他、以前から地域づくり・地域活性化分野においては、ワークショップのように合意形成や成果を求めるには至らないが、全国各地域の活動について、情報交換、仲間づくり、更なる発展の契機とすることを目的に、各種の交流集会や大会

が開催されているところである。

#### 3.2 地域づくり分野の交流集会・ワークショップ

地域づくり・地域活性化分野における交流集会やワークショップには、民間主導のもの、地方自治体主導のもの、地方自治体・民間・国等から成る実行委員会を組織して開催するものなど多様なパターンがある。

以下では、各イベントのホームページ等を基に、このような交流集会・ワークショップ(全国、ブロック規模の事例)から3つの事例を紹介する。

##### <全国過疎問題シンポジウム>

- ・ 総務省及び全国過疎問題シンポジウム実行委員会(開催道府県、全国過疎地域自立促進連盟、開催道府の市町村過疎地域対策協議会から構成。)が主催し、過去20回開催。
- ・ 開催趣旨は、時代に対応した新たな過疎対策のあり方等について、行政関係者をはじめ、広く住民や地域づくり関係者等を交え幅広く議論を深めるとともに、参加者相互の情報交換・交流を図ること。
- ・ 日程は、過疎地域自立活性化優良事列表彰式、基調講演、パネルディスカッション、交流会、分科会(優良事例発表又はパネルディスカッション。2009年は4分科会。)、現地視察から成る1泊2日。
- ・ 参加者は、全国の行政、地域づくり関係者約700~800人。

##### <全国ほんもの体験フォーラム>

- ・ 全国ほんもの体験フォーラム(開催地)実行委員会の主催、全国ほんもの体験推進連絡協議会の共催で、過去6回開催。
- ・ 開催趣旨は、体験型観光の先進地や各旅行会社等を招き、受け地の価値の再発見と全国に誇れる「ほんもの体験」の普及のため、その理念や手法について共に考え、関係者が幅広く交流するとともに、体験型観光の適地として全国に強くアピールする機会とすること。
- ・ 日程は、体験ツアー(プレイベントツアー)、全体フォーラム(事例発表、記念講演、基調提案及びパネルディスカッション、情報交換会)

及び課題別研究分科会（2009年は4分科会）から成る2泊3日。

- ・ 開催県内外から受け地関係者や旅行会社等の約600人が参加。

### <地域づくり博覧会>

- ・ 東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会（東北圏の地域コミュニティの自立及び再構築を目的として大学、企業、行政等様々な主体が連携したネットワーク）が主催し、2009年に第1回を開催。
- ・ 開催趣旨は、様々な主体が日頃取り組んでいる地域づくり活動について意見や情報を交換し、新たな気づきやつながりを生み出すことを目的に、本公開フォーラムを通じて東北圏で活動する地域づくりのネットワーク形成を図り、地域再生・自立の必要性を広く社会にアピールすること。
- ・ 日程は、地域づくり見本市（ポスターセッション）、シンポジウム（基調講演、パネルディスカッション）、ワークショップから成る1日のイベント。
- ・ 参加者は約400団体（人）。

### 3.3 ワークショップの地域づくりへの効果

地域づくり・地域活性化分野における交流集会・ワークショップの効果としては、①リーダー個人に依拠するところが大きく、横のつながりが脆弱であることが多い地域づくり主体間における人脈・ネットワークの形成や情報交換、②地域課題という「正解のない」課題の解決に取り組む、参加型・体験型のプロセスを通じた相互作用・シナジー効果、③自分だけが悩んでいるのではないことに気づき、自分の活動を客観視することにより、やる気や励みが生じるエンパワーメントの3つが考えられる。

#### (1) 人脈・ネットワーク形成、情報交換

上記の「全国過疎問題シンポジウム」や「地域づくり博覧会」をはじめ多くの交流集会等が開催目的としてこの点を掲げている。

地域づくり主体同士のネットワークをコーディネートする機能（例えば中間支援組織）が十分でない環境においては、NPO法人をはじめとする

地域づくり主体同士が知り合い、情報交換し、連携するといった動きが少ないことは否めない。特に小規模な団体や個人にあっては、日々の活動で手一杯であることが多く、なかなか他の主体が視野に入っていないことが多い。

こうした中では、交流集会・ワークショップによる交流、ネットワーク形成、情報交換の意義が大きいと言える。とりわけ、地域外の視点・考え方を導入する契機として、他主体とのマッチングがなされる貴重な機会であると言える。

#### (2) シナジー効果

中野（2001）によると、ワークショップでは、一人では決して思いつかなかったような発想やアイデアが出てきたり、自分だけでは抜け出せなかった「暗礁」から大きく踏み出せるなど、参加者グループの相互作用の中でシナジー効果が生まれてくる。

地域づくり・地域活性化分野のように何らかの成果や合意形成を重視するワークショップでは、こうした効果の意義は大きい。

また、参加者等による双方向のコミュニケーションを通じて、地域づくり主体間の新たなネットワークが形成されたり、相互の活動への共鳴や、新たなアイデアに対して新たなネットワーク、パートナーシップが生まれる等のダイナミズムが起こることも期待される。

#### (3) エンパワーメント

地域づくり・地域活性化は普遍的な正解のない分野であり、日頃の活動において、試行錯誤の中で壁に突き当たることも多い。

こうした場合、深刻な問題に悩んだり、行き詰まったりしているのが自分だけではないことへの気づきが、次の一步を踏み出す力を与える。これによって、前向きに取り組んでいこうとする勇氣や希望を得ることも多い。人を励まし、力づけるというエンパワーメントの効果も、交流集会やワークショップの地域づくり上の意義として大きなものがある。

地域づくり活動の分野では個々の活動主体が横につながることは少ないため、交流集会やワークショップにおいて、同じような課題に直面していたり、同様の状況下で活動している他者と交流す

ることは、「元気をもらう」、エンパワーメントの観点から特に重要である。

#### 4. 「半島地域づくり会議 in 幡多」の事例

本章では、地域づくり・地域活性化分野における交流集会・ワークショップの役割、効果等について、国土交通省都市・地域整備局（2009）等に基づき、「半島地域づくり会議 in 幡多」の事例に即して概観することとしたい。

##### 4. 1 半島地域づくり会議

半島地域は、海・山・里の多様な資源に恵まれ、海を通じた交流の拠点として栄えてきたことなど、地理的・歴史的に多くの共通点を有している。

半島振興の推進に当たっては、半島地域が抱えている諸課題を解決し、多様な主体の参画による地域づくりを進めていくためには、共通した課題と問題意識を持つ各半島地域の住民、行政関係者等が一同に会し、課題解決のための知見の共有を図ることが有効であることから、平成 18（2006）年度以来、毎年「半島地域づくり会議」が開催されている。

第 1 回の能登地域（石川県）、第 2 回の宇土・天草地域（熊本県）に続いて、第 3 回は高知県幡多地域を舞台に「半島地域づくり会議 in 幡多」として平成 21（2009）年 1 月 30 日（土）～2 月 1 日（日）の日程で開催された。

##### 4. 2 「半島地域づくり会議 in 幡多」の概要

今回の開催地である幡多地域においても、地域活力の停滞が指摘され、過疎化・高齢化が進行する一方、UJI ターン者の増加や教育旅行の積極的誘致等を契機に、都市との交流促進や特産品開発等に取り組む新しい動きも現われている。

そこで、今回の会議では、幡多地域で様々な地域づくり活動に取り組んでいる人たちとともに、地域を歩き、語り、考えることを通じ、「半島らしさ」を活かした地域づくりの姿を模索することを目的とした。

そこで、地域主体の手作りによる考え・学ぶ会議を目指し、次のような 1 泊 2 日の日程となった。1 日目は、体験プログラム等への参加を通じて、地域課題の解決方法についてともに語り、考える「フィールドワーク」を実施し、夜は幡多地域で

継承されてきた「食」を一同に会した交流会「幡多の食談義」を開催し、宿泊は民泊で、地域の方々の暮らしに直に触れて頂いた。

2 日目は黒潮町に会場を移し、幡多地域や他の半島地域の地域づくりに取り組む方々の事例発表、「幡多らしさ、半島らしさを表現する～柔軟でしなやかなネットワークをめざして～」をテーマとする徹底討論を実施した。また、会場前では地元食材を通じて生産者と消費者を直接つなげる「ファーマーズ・マーケット in 幡多」を地元有志の方々が同時開催した。

以下では、今回の会議の概要を述べる。

##### (1) フィールドワーク

事前に申込があった全国の半島地域及び地元高知県内から地域づくり団体、行政関係者等の約 70 人が次の 3 地区にわかれて参加した。

###### ① 四万十市片魚サイト

子どもの農村体験、民泊体験の受入取り組みを学ぶとともに、プログラムとして提供している食づくり体験を通じて、体験交流による地域・来訪者相互の多様な効果、価値について考えた。

###### ② 三原村サイト

地域の高齢者とともに森林の散策や間伐体験、地域食の体験などを行い、地域住民を含めた地域の多様な資源の再認識、活用のあり方について学んだ。

###### ③ 宿毛市・大月町サイト

海を活かした屋外プログラムが充実した同地域で、オフシーズンのプログラムのあり方を議論。強風のため海上交通での移動を中止したことで、風など負の資源を活用する方策を考えた。

各サイトでのプログラム終了後、食談義を開催する土佐清水市窪津に移動し、各サイトでの成果を「総括ディスカッション」として報告・共有した。

##### (2) 幡多の食談義・民泊

土佐清水市窪津地区にて、幡多の海・山・里の食材を活用した郷土料理を味わいながら、参加者同士で交流を深めた。

その後、民泊体験として、参加者は窪津地区と隣接の津呂地区の一般家庭（12 家庭）に分泊、そ

それぞれの家庭でさらに交流を深めた。

### (3) 全体会議

2日目は、ふるさと総合センター（黒潮町）を舞台に、公開型の会議が行われた。出席者は延べ約 250 人であった。

全体会議の前半は、幡多地域内外の半島地域で地域づくりに取り組む団体から次のテーマで事例報告が行われた。

- ◎ 苺をまるごと活かした地域の特産品開発と、モノだけではない作り手の“想い”を届ける取り組み [大月町 苺氷り本舗株]
- ◎ 四万十川「龍」を下るドラゴンランで、地域の資源・人との交流を楽しむ [四万十市 四万十ガイア自然学校]
- ◎ 千枚田保存を出発点に体験、交流、モノづくりに広がる地域活性化の取り組み [千葉県鴨川市 NPO 法人大山千枚田保存会]

後半は、「幡多らしさ・半島らしさを表現する～柔軟でしなやかなネットワークをめざして～」と題して、次の6氏によるシンポジウムを開催した。  
(敬称略)

#### ○コーディネーター

渋澤寿一 (NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会理事長)

#### ○パネリスト

梅原 真 (デザイナー・梅原デザイン事務所)

大原泰輔 (NPO 法人高知県西部 NPO 支援ネットワーク理事)

八木和美 (法政大学大学院エコ地域デザイン研究所研究員)

八木雅昭 (NPO 法人高知県西部 NPO 支援ネットワーク副理事長)

山下慎吾 (空間生態研究所)

その際に出された主な発言を整理すると次の通りである。

- 半島地域は、森と里と川と海が全部自前であって、それらを全部うまく使いながら暮らしをつくってきた。高度成長期に角を曲がり間違えなかったらどんな日本があったのかを考えると、半島からもう 1 回スタートすることが大きなテーマ。暮らし、価値観の大きな

転換点にある今日、半島から何を世の中に出していくのか。

- 「端っこにはとても魅力があって、そこはとてもおいしそう」と半島をとらえている。内陸からの交通路になった時点で半島は末端の端っこになったが、海路の時代には、むしろ先端、「先っちょ」。「先っちょ」と「端っこ」が混在しているのが半島。
- 異分野・地域で活動する人・団体と協働して幡多地域全体を考えていきたい。地域づくりは、そこに暮らす住民が主体的に地域づくりにかかわっていくことが大事。
- 地域づくりのひとつの手法としてのエコツアーリズムの振興をめざしている。交流を通じて地域の人々を元気づけながら、少しでも経済的な基盤を強くしていきたい。
- 高知県の西南である幡多は資源の宝庫。ひとつの生き方に結びつけられる。地域がこういう生き方をしているというアイデンティティをメッセージにしなければいけない。自分たちの考え方のメッセージ、コミュニケーションする言葉を自分たちが発信しているかを自問すべき。
- 地元の人に「もう少し幡多のことを勉強してきてほしい」と言われ、都市から訪問する人間の課題を考えている。地域との関係づくり、何をお返しできるかを意識している。
- 「風の人・土の人」に加えて、「風の人と土の人だけでは砂漠化するので、水の人が大事」の発想がある。これに加えて、色のない人、コトをつなぐ・触媒になる人も必要だ。
- 「深化する幡多マップ」をつくっている。個人が情報を持ち寄り地図を1から作ることで、深い幡多が見えてくる。楽しさを伝えるのは「宣伝ではなく、口伝に」ということがポイント。
- 「つなぐ」を意識的に、触媒になる人がメンバーの中に入ることによってネットワークは広がっていく。つなぐ人を育てることが必要。
- 地域の協働が大事。住民と行政、企業を含めて地域をきちんと見て、同じ土俵で取り組むために、縦割りを横につなぐネットワークが必要。

- この高知で暮らしが立てられる職場、職業といった包容力を備えた地域をつくりたい。
- 人類社会は二股の道を右に行くか左に行くかの局面があった。この道の行き先が分からなくなっている。半島は遅れているが故に二股の地点に戻るのに近い。遅れたと言われる半島が真実に近いところにおいて、そこにはほとつもない個性がある。
- 地域の人々が楽しみながら暮らしているのを見に人々が訪れる。自然は10分で飽きるが、人間は一生飽きない。そこに住んでいる人たち、人間を見せていくということが一番のコミュニケーションであり、商売なのではないか。

#### (4) ファーマーズ・マーケット in 幡多

同時開催イベントとして、地元有志の方々が、安心・安全な食づくり・モノづくり、暮らしづくりをめざしたい生産者やグループ、市民等が出店する「ファーマーズ・マーケット」を開催した。地元の食材、食材を活かした加工品、工芸品等45の出店者があり、1,000人を超える来訪者で賑わった。

#### 4. 3 高知県西部NPO支援ネットワーク

今回の半島地域づくり会議 in 幡多の開催に当たっては、事前に、地元において地域づくり・地域活性化活動を行っているNPO法人や民間団体の代表、地方自治体等を構成員とする「地域実行委員会」を3回にわたり開催し、会議のテーマ・内容等の企画、開催に向けた役割分担等を議論しながら、地域主導で検討・調整を行ってきた。

その際、地元自治体とともに大きな役割を果たしたのは、幡多地域を中心に活動を展開しているNPO法人「高知県西部NPO支援ネットワーク」(以下「西部ネット」という。)の理事の方々である。

そこで、西部ネットの概要について、全体会議の資料及び2008年11月に行ったヒアリング結果(ご協力頂いた方々にこの場をお借りして、改めて感謝申し上げます。)を基にここで紹介しておきたい。

西部ネットは、高知市から片道2時間以上を要する高知県西部においても中間支援機能を確保したいという高知県等の要請を契機に、2002年に県

西部の地域課題を考える緩やかなネットワークとして設立され、2004年にNPO法人化されて現在に至っている。

その活動目的は、住民が自発的に行う非営利の公益活動の促進を支援する事業を行い、活力ある地域の創造に寄与することとされている。具体的な事業としては、①NPOに係る地域の学習・交流会、②研修会、講演会、③行政との協働推進事業、④情報発信、⑤県内NPO中間支援組織との連携事業等を展開している。

活動の特徴としては、①町村合併後の高知県西部8市町村を活動エリアとし、広域でのNPO中間支援の活動を行っていること、②傘下団体それぞれの活動を前提に、それらを尊重しながら無理のない協働を目指していること、③理事を介した人と人との関わり、活動と活動の結びつき、といった点が挙げられている。一方、課題としては、運営資金の確保や事務局体制が不十分であることが認識されている。

具体的な活動については、各理事(傘下団体のリーダー等である。)が中心となって個別分野の活動を行うとともに、こうした活動を理事のネットワーク(集団)が束ねていく形をとっている。活動エリアが広域であるため、課題が域内すべてのエリアに当てはまるとは限らないが、地域にとって必要な取り組みを地域に密着した理事が掘り起こしながら事業を進めているとのことである。

西部ネットは、地域で取り組んでいる人や個々のNPO等がネットワークに集まってきて形成された。ベクトルが同じ人間が「人縁」で集まったとも言える。こうしたプラットフォームとしての西部ネットの存在が、個々の地域やリーダーの活動を活性化する役割も果たしている。

以上のように、西部ネットは、域内で地域活性化に取り組んでいる主体同士をつなぐ、民間主導のプラットフォームとなっている。こうした存在は、都市部以外では非常に少なく、今後、ルーラルな地域における地域づくりへの多様な主体の参画を促進していく上で先導的なケースと位置づけられる。

#### 4. 4 本事例からの示唆

前述のように、地域づくり・地域活性化分野の交流集会・ワークショップの効果として、参加者

(地域づくり関係者)に対するものとして、①参加者相互間の人脈・ネットワークの形成、活動内容等に関する情報交換、②地域づくり関係者が参加型学習を通じて、普遍的な正解のない課題に取り組むことによる知識創造等のシナジー効果、③同様の課題に直面したり、類似した活動環境にある参加者相互がふれあうことによるエンパワーメントの3つが挙げられる。

このような交流集会・ワークショップの企画立案、調整、運営実施を開催地の地域づくり主体が担った場合には、地元の関係主体への効果も期待できる。今回の半島地域づくり会議 in 幡多の場合、西部ネット関係者によると、次のような効果が指摘された。

- ① フィールドワークの開催に向けて、調整・準備・実施の各段階で西部ネットの各理事がフィールドワーク地区(3地区)に入ることにより、3地区における地域活動主体とのつながりが形成された。その結果、幡多地域内における西部ネットのネットワークが新たに広がった。
- ② 地域実行委員会をはじめ、地域づくり会議の実施に向けた、幡多地域内の関係主体(NPO法人、地域づくり団体、技を持つ個人、行政等)との連絡調整や意見交換を通じて、西部ネットの従前からの域内ネットワークが強化、深化していった。
- ③ これまで窪津地区は小中学生の漁業体験・民泊の受け入れには実績があり、ある程度の自信を持っていたが、「幡多の食談義」及び参加者の民泊を受け入れたことにより、大人の民泊と漁業体験もやれるという手応えを感じ、自信がついたという面がある。

以上の点を踏まえると、交流集会・ワークショップの開催は、開催地に対しても次のような効果を及ぼすことが期待されると考える。

- ① 交流集会等の開催を契機に、地域内の関係主体間の意思疎通が密接になり、地域の一体感が醸成されるとともに、地域づくりに係るプラットフォームとしても機能するようになる。
- ② 交流集会等において提起された地域経営上の課題を受けて、地域としての対応を始める契機となる。
- ③ 地域内の関係主体間に、交流集会等をハンドリングした経験からマネジメント(企画・調整・

実施)の「相場観」ができ、地域づくりに係るマネジメントサイクルが形成される。

- ④ 交流集会等への域外参加者を通じて、外部の関係主体とのネットワークが拡大、深化するとともに、他地域の地域づくり関係者との交流を通じて、域内の地域づくり活動がエンパワーメントされる。

## 5. おわりに

本稿では、地域づくり・地域活性化主体が活動を進める上でのネットワークの重要性に言及するとともに、そのようなネットワーク形成の契機としての交流集会・ワークショップの意義・効果について考えてみた。

地域づくりに係る交流集会・ワークショップは、参加者相互間及び開催地域に対して様々な効果をもたらしている。地域づくり・地域活性化活動を持続するためには、地域においては交流集会等で培った域内外のネットワークを深化・充実させることにより、一層の活動の活発化と域内外の様々な主体とのつながりの伸展を図る努力が求められている。

(本稿は筆者の個人的見解です。)

## 【参考文献】

- 内閣府経済社会総合研究所(2007)「地域の人材形成と地域再生に関する調査研究報告書」
- 国土交通省都市・地域整備局(2007)「地域づくり活動に関わるネットワーク形成調査業務『永らえる地域づくり活動の秘訣～ネットワークの威力と面白さ～』報告書」
- 法政大学大学院エコ地域デザイン研究所(2008)「ルーラル・エリアの地域マネジメントにおけるNPOの役割—高知県四万十・幡多地域を対象に—現地シンポジウム報告書」
- 敷田麻美(2005)「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『えぬのくに』第50号
- 中野民夫(2001)『ワークショップ—新しい学びと創造の場—』岩波新書
- 世古一穂(2007)『協働コーディネーター—参加協働型社会を拓く新しい職能—』ぎょうせい
- 国土交通省都市・地域整備局(2009)「平成20年度半島地域づくり会議 in 幡多事業報告書」